

**多様な他者の考えに触れ、自己の考えを広げ深める児童の育成
—ICTを活用して他校、保護者、異学年とつながる授業実践—**

総合支援部小中学校支援課小中第2班 長期研修員 杉本 渉

1 主題設定の理由

近年、グローバル化や情報化が進展したことなどにより、社会の問題は複雑で予測困難となっている。このような時代を生きる子どもたちは、一人で解決できない問題を他者と協働し、解決する力が必要となってくるであろう。

未来の社会を見据え、児童生徒に学習指導要領で示された資質・能力を育成することが重要である。「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」では、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』という観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、これまで培われてきた工夫とともに、ICTの新たな可能性を指導に生かすことで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくことが重要」とあり、学校教育において、資質・能力の育成に向けて「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められていることが分かる。

研究協力校は全校児童30名と小規模校である。1学級の平均児童数も5人と少なく、きめ細かな指導が可能である。教員も児童の学習到達度に応じて指導方法の工夫をしたり、一人一人の興味・関心に応じた学習課題に取り組む授業を考えたりするなど、「個別最適な学び」を意識し、授業改善について議論している姿をよく見る。しかし、1学級の児童が少ないことから、「協働的な学び」を行う際、参考にできるのは数名の児童や教員の意見に限られているため、児童が多様な考えを参考にすることに難しさを感じている。

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（以下、「答申」という。）では、ICTを活用して児童が多様な他者の意見や考えに触れ、「協働的な学び」の機会を充実させる必要性が示されている。小規模校においても、ICTを活用することで「協働的な学び」に取り組む機会の充実を図ることができると思う。さらに「答申」では、「協働的な学び」は「同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや他の学校の子供との学び合いなども含む」とある。ICTを活用して時間的・空間的制約を超えることにより、学級の児童に限らず、異学年の児童や他校の児童、保護者や地域の人などの意見や考えに触れる機会を設けることができれば、小規模校においても、児童は多様な他者の考えに触れ、自己の考えを広げ深めることができ、その学びを「個別最適な学び」に生かすことができると思う。

そこで、本研究では、ICTを活用して時間的・空間的制約を超え、多様な他者の考えに触れる機会を設けた授業を構想し実践することで、児童が自己の考えを広げ深めることができたかを検証する。

2 研究の目的

ICT を活用して時間的・空間的制約を超え、多様な他者の考えに触れる機会を設けた授業を構想し実践することで、児童が自己の考えを広げ深めることができたかを検証する。

3 研究の方法

- (1) 研究協力校の児童と教員に、事前の質問紙調査を実施して、実態を把握する。
- (2) ICT を活用して時間的・空間的制約を超えて多様な他者の考えに触れる機会を設けた授業を構想し、研究協力校において検証授業を実施する。
- (3) 授業実践ごとの授業記録や児童の振り返りの記述や各種データ等を基に、児童が自己の考えを広げ深めることができたかを分析・考察する。
- (4) 事前と事後の質問紙調査結果を分析し、研究の成果と課題をまとめる。

4 研究の内容

(1) 文献による必要な視点の整理

ア 多様な他者の考えに触れるの捉え

「答申」では「『協働的な学び』は、同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや他の学校の子供との学び合いなども含むものである。」とある。研究協力校は同一学年・学級の児童数が少ないという課題を抱えているため、本研究では、多様な他者として、同一学年・学級ではなく、異学年の児童、他校の児童、保護者などに焦点を当てる。さらに、ICT を活用して、このような多様な他者の考えに触れることができるようにする。

イ 自己の考えを広げ深めるの捉え

「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編」では自己の考えを深めた児童の姿を「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすること」と示している。本研究においても、これらのことを児童が自己の考えを広げ深めた姿の参考にする。授業実践においては、各教科の特質に応じて、自己の考えが広がり深まった姿は様々である。そのため、各教科の学習指導要領を基に、自己の考えを広げ深める児童の姿を授業者が想定し、授業中の児童の発言やワークシートへの記述などから、その姿を見取り検証していく。授業者の想定を超えた自己の考えを広げ深める児童の姿も、同様に発言やワークシートへの記述などから見取り検証する。

ウ ICT 活用の視点

多様な他者と情報を共有する際、他校の児童や異学年の児童と授業時間を揃えたり、保護者に来校してもらったりするなど、課題は多い。「教育の情報化に関する手引」では、「時間や空間を問わずに、音声・画像・データ等を蓄積・送受信でき、時間的・空間的制約を超えること」を ICT 活用の強みとしている。音声・画像・データ等の蓄

積・送受信が可能なクラウドを活用した情報共有を行うことで、時間的・空間的制約にとらわれるという課題を克服できると考える。そこで、本研究では Google ドライブやスライドなどクラウド上で非同期に ICT を活用することを考える。

(2) 事前質問紙調査（6月）と分析

6月に研究協力校の全校児童と教員に事前質問紙調査を実施した。記述が難しい低学年の児童に対しては一人一人聞き取り調査を行った。

ア 多様な他者の考えに触れる

児童を対象にした「授業の課題を解決するために誰の意見を参考にしていますか」（複数回答）という質問では、表1のような回答を得ることができた。

表1 授業の課題を解決するために児童が意見を参考にする他者の割合 [n=29]

同一学年・学級以外の他者					
1. 先生	2. 友だち	3. 家族	4. 地域の人	5. 他の学校の子	6. その他
82.7%	72.4%	51.7%	3.4%	3.4%	0%

高い
←
→
低い

学習の場面における接触頻度

日常の授業で児童の近くにいる、同一学年・学級の友だちや教員の考えに触れる機会は70%以上と高い。友だち、先生の次に値が高いのは家族で51.7%である。学校の授業ほど時間は長くないが、家庭学習を行う際に家族に意見を求めていると考えられる。地域の人、他の学校の子等、学習の場面での接触頻度が少なくなればなるほど、意見を参考にする割合が低くなっていることが分かる。このことから、研究協力校の児童は、学習の場面における物理的な接触頻度が高い他者の意見を参考にする傾向があると言える。

イ 自己の考えを広げ深める

教員を対象にした「伊久美小で協働的な学びを行う際の課題を教えてください」という質問に対して、「少人数のため、多様な考えや考えの深まりが期待できない」など5人中3人（60%）の教員が、少人数を理由に協働的な学びを行う際に課題を感じていることが分かった。また、児童を対象にした「授業で、他の人の考えを知ることには、どのようなよいことがありますか」という質問では、「自分の考えを見直せる」「新しい考えが思いつく」など、本研究で考える自己の考えを広げ深める姿について記述した児童が、6人（20.6%）に留まった。一方、「仲良くなる」など、自己の考えを広げ深める姿と関連のない記述をした児童は、13人（44.8%）に達した。さらに、10人（34.4%）の児童は、無回答であった。このことから、研究協力校の児童は考えを広げ深めるよさを実感していないことが考えられる。

(3) 研究構想

ア 授業実践 I

授業実践 I では、4年生社会科「わたしたちの県のまちづくり」の単元で、図1のように単元計画を作成した。県内の市町が地理的環境の特色を生かしてまちづくりや産業の発展に努めている県内の様子を捉え、それらの特色を考え表現することなどをねらいとする。

時	「わたしたちの県のまちづくり」の学習内容	ICTの活用
1	県内の特色ある市町のまちづくりを考えるという学習課題をつかむ。【合同授業】	
2	自分の住む地域の人々が、まちづくりにおいてどのような努力や工夫をしているかを考える。	自由に互いのスライドを見るができる状態にしておき、必要があれば、付箋機能を使って疑問に思ったことを質問できる状態しておく。
3	自分の住む地域の人々が、まちづくりにおいてどのような努力や工夫をしているかをスライドにまとめる。	
休み時間にクラウド上に保存された他校のスライドを見る。自分の地域と他校の地域の違いを考える。		
4	山間部と都市部のレポートを比較することで、地域の位置や自然環境によって、人々のまちづくりの工夫や努力が違うことに気付く。	
5	県内の特色ある市町の人々が、まちづくりにおいてどのような努力や工夫をしているかを考える。	
6	県内の特色ある市町の様子について調べ白地図も活用しながらスライドにまとめる。	
休み時間に完成した他校の児童のスライドを見る。その地域の特色を生かしたまちづくりについて地域の様子や人々の協力関係などについて、自分の調べたものとの視点の違いを考える。		
7	県内の特色ある地域では、人々が協力し、特色あるまちづくりや観光など産業の発展に努めていることを再確認する。	

図1 第4学年社会科「わたしたちの県のまちづくり」の単元計画

他校の児童の考えに触れる

研究協力校の市では令和6年度に、研究協力校を含めた5つの小学校が統合するため、統合前の交流事業として5校での合同授業を4年生社会科で行う。9月中旬に5校の児童が1つの学校に集まり、第1時の授業を受ける。合同授業は全7時間の単元の中で1時間だけだが、合同授業後もICTを活用し、他校の児童の考えに触れる機会を設定した。

単元前半では、地理的環境の特色を生かしてまちづくりや産業の発展に努めていることを押さえたい。研究協力校の地域は山間部に位置し、自然環境が豊かで林業や農業などの産業が盛んな地域である。一方、スライド上で情報を共有する学校は都市部に位置し、人口も多く観光業が盛んな地域である。同学年ではあるが山間部と都市部という地理的環境の違う他校の児童と互いの地域を比較することで、地域によって地理的環境や地域の特色をまちづくりに生かす工夫や努力が違うことを実感できる。単元後半で県内の市町の様子を考え表現していく際、自分たちの住む山間部の地理的環境だけでなく都市部の地理的環境を生かしたまちづくりを実感した児童は、研究協力校の市以外の市町の様子についても地理的環境に着目し学習を進めることができると考える。

他校の児童の考えから自己の考えを広げ深める

第2時以降、他校の児童と学びを共有する場面でクラウドを活用することで、相手との時間調整をすることなく、いつでも他校の児童の考えに触れることができるようにする。地理的環境の違う他者からの意見や考えに触れることで、自分の住む地域の特色がはっきりしたり、地域の新たな問題を見いだしたりすることができ、再度、必要な情報を精査するなど考えを広げ深めることができると考える。

イ 授業実践Ⅱ

授業実践Ⅱでは、5年生国語科の「B書くこと」の領域で単元を構想し、図2のように単元計画を作成した。この単元では、地域の魅力を基に自校の校歌の歌詞を作るという言語活動を通して、目的や意図に照らしてよりよい文になっているか推敲する力を身に付けることをねらいとする。

時	「伊久美の更なる魅力を校歌の4番で表現しよう」の学習内容	ICTの活用
1	歌詞について構成や書き表し方を考え、校歌の4番を作詞するという学習課題をつかむ。	
2	地域の魅力などについて考え、歌詞に使う言葉のイメージをもつ。	
地域の魅力について保護者にGoogleフォームでアンケートを実施する。		
3	保護者の意見を参考に、歌詞に使う言葉を選び、歌詞の構成を考える。	アンケートの回答を学級内で共有する。自分の考えになかった地域の魅力を知り、新たな視点から言葉を考える。
4	作った歌詞を読み、感想や疑問を伝え合う。	
Google Classroomを使って作成した校歌の4番を上級生に送る。上級生から歌詞の構成や書き表し方について意見をもらう。		
5	感想やアドバイスを参考に、よりよい歌詞を考え、整える。	上級生の意見を参考にして、よりよい歌詞となるように構成や書き表し方を再考し、歌詞を整える。

図2 第5学年国語科「伊久美の更なる魅力を校歌の4番で表現しよう」の単元計画

(7) 保護者の考えに触れ自己の考えを広げ深める

保護者の考えに触れる

歌詞を考える際、地域の魅力が伝わるような言葉を考える。語彙の少ない児童は、校歌に合う言葉を探すことに苦慮することが考えられる。また、歌詞の構成に目を向けると、研究協力校の校歌の歌詞の構成は1番から3番のそれぞれ前半に「自然に関する内容」が書かれており、後半に「地域や保護者など大人が研究協力校の児童に望む姿」（以下、「児童に望む姿」という。）が書かれている。後半の児童に望む姿は児童だけでは想像しにくい。そこで、単元前半でGoogleフォームを活用して保護者へ伊久美の魅力や児童に望む姿についてのアンケート（図3）をとる。児童が、その結果をいつでもクラウド上で読むことができるようにする。

質問1	伊久美にはどのような魅力がありますか。3つ答えてください。 例：犬間のお城 自然が豊か
質問2	伊久美小の児童に、どのような子供になってほしいですか。3つ答えてください。 例：希望を持った子

図3 保護者のアンケート質問内容

保護者の考えから自己の考えを広げ深める

児童は、保護者からのアンケート結果を参考にすることで、自分では思いつけない表現や考えを知ることができたり、自分と同じ考えでも表現の仕方が違う言葉に気がついたりすることができる。歌詞をよりよくするために、新たな言葉を使うなど、更に工夫をしていくことが考えられる。

(イ) 上級生の考えに触れ自己の考えを広げ深める

上級生の考えに触れる

完成した歌詞を学校行事の際に掲示し、地域の人たちへも見てもらう機会を設定する。そのため、構成や書き表し方について、校歌に合った構成になっているか、自分の思いが相手に伝わるかなど推敲することが必要となる。そこで、上級生にアドバイスをもらい推敲に役立てることとする。単元後半では、クラウドを活用し、構成や書き表し方が校歌に合っているかなどのアドバイスや、歌詞の感想を上級生からもらう。人数が少ないという小規模校のメリットを生かし、授業開始までに上級生3名から5年生7名全員へアドバイスの記入に協力してもらうこととする。

上級生の考えから自己の考えを広げ深める

授業開始までに Google Jamboard（以下、ジャムボードという。）上に上級生から一人一人に具体的なアドバイスが届いているため、より推敲がしやすい。上級生からのアドバイスを基に、1人でじっくり考えたり、同級生と対話をしたりしながら、よりよい歌詞になるよう、自分の考えた歌詞の構成や書き表し方を再考すると考える。

(4) 授業実践

ア 授業実践 I

他校の児童の考えに触れる

図4は、単元前半で児童が作成したスライドである。山間部にある研究協力校は、11人中8人と72.7%の児童が自然を生かしたまちづくりについてスライドに表現している。一方、都市部にあるスライド上で情報を共有する学校では、建造物を題材にしていた児童が27人中18人で66.6%と最も多く、続いて伝統文化である祭り、石像、公園などを題材としていた。

伊久美の有名なものとその理由			稲荷町の有名なものとその理由		
特産物	伝統文化	自然環境	特産物	伝統文化	自然環境
どこにある？	どういう場所？	何が有名？	どこにある？	どういう場所？	何が特色？
伊久美の全体 	自然がいっぱい 穏やかな場所 	お茶 		住宅がいっぱいある。 田や畑がある。	稲荷神社 
人々はどんなどりよくやくふうをしている？			人々はどんなどりよくやくふうをしている？		
色々な人に知ってもらうように宣伝など多くの人にしてもらうように努力している。 理由は坂本藩吉が広めた。 伊久美物産会社(二俣公会堂)を立てて、発展した。			稲荷神社は、いつでもきれいに使えるように街の人に、掃除してもらって街の人の協力を得て、稲荷神社がきれいにお祈りや、行事がスムーズに行えるようになっているのです。 理由は 稲荷町の目立つ特色として、稲荷神社が、毎年、行事を行っていることとして稲荷神社は、稲荷町で、いろんな行事の行って、稲荷町で、一番目立つ特色になっていったと思います。		

図4 児童が作成したスライド（左：研究協力校 右：スライド上で情報を共有する学校）

児童は、クラウド上で他校の児童のスライドを見て、自分たちの学校では題材に挙がらない博物館や遺跡等をどのようにまちづくりに生かしているかを知った。

他校の児童の考えから自己の考えを広げ深める

図5は、第4時で山間部と都市部の学校のスライドを比較した児童の発言を基にした板書の一部である。児童は、自分たちの住んでいる山間部に住む人々の工夫や努力だけでなく、都市部に住む人々の工夫や努力についても考えた。「人々が建物の管理や掃除をしている」など、都市部のスライドの中から自分たちと共通する内容を探したり、観光客が多いことから「外国人に観光案内をしているのでは」など都市部に住む人々の工夫や努力を想像したりした。授業後の振り返りからも、山間部と都市部を比較してまとめている記述があった(図6)。

単元後半では、静岡県内の市町について調べ学習を行った。単元前半に山間部と都市部を比較したことで、地理的環境を生かして人々がまちづくりの努力や工夫をしていることに気付いた児童は、山間部や都市部以外の地域を調べてみたいと考えたり、自分たちと同じような山間部を調べたいと考えたりした。単元前半の学習を生かし、地理的環境に着目して学習の課題を決めていく児童の姿が見られた。

イ 授業実践Ⅱ

(7) 保護者の考えに触れ自己の考えを広げ深める

保護者の考えに触れる

図7は第1時、授業者が地域の更なる魅力を校歌の4番で表現することを伝えた時の児童の発言である。

「1番から3番にはほぼ大体言われちゃってるじゃん。菩提山だってさ、鮎とか川のことだって言われちゃってる。お茶だって言われちゃってるし。何がある、他に。」

図7 学習課題を伝えた際の児童の発言

校歌の中に自分が今考えられる地域の魅力がすでに入っていると考えていた児童の発言を受けて、第2時終了後、保護者にアンケートをとった。図8は保護者からのアンケート結果である。図7で発言した児童は第3時以降、保護者のアンケートを何度も見返して参考にしながら歌詞を作成していた。

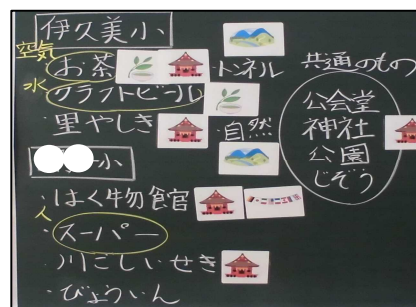


図5 児童の発言を基にした板書の一部

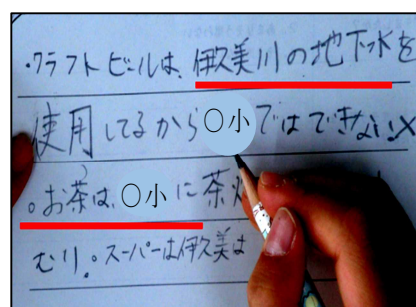


図6 山間部と都市部を比較した振り返り

伊久美にはどのような魅力がありますか。			伊久美小の児童に、どのような子供になってほしいですか。		
川の流れる音	人工的な光ではない月明かり、星、朝日、夕日が綺麗(きれい)に見える	美味しい空気	優しい子	人とのコミュニケーションがたくさんとれる子	想像力豊(ゆた)かな子
星がきれいに見える、近くに見える	伊久美地区の人々の温かさ	たくさんの茶畑	元気いっぱいの子	人を助ける子	優しい子
早朝のすごく澄(すん)だ空気	四季折々(しきおりおり)の小鳥のさえずり、鳥の鳴き声	星がキレイ	人に優しくできる子	誰にでも分(わ)け隔(へだ)てなく接(せつ)する子	コツコツがんばる子
星がきれい	鳥のさえずりと川のせせらぎが聞こえて自然を感じれる	伊久美小の150年の歴史(れきし)	のびのびと好きな事に熱中出来る子	色んな事に頑張れる子	やさしい子
街では聞こえない自然の音(川、木、鳥、鹿など)が常に聞こえる	ぼだい山からの景色	清(きよ)らかな川	伊久美の山のように壮大(そうだい)な夢を持った子	伊久美の川のように心が綺麗(きれい)な子	伊久美の自然の様に時に厳(きび)しくも優しく人を包(つつ)み込める子

図8 保護者のアンケートの回答

保護者の考えから自己の考えを広げ深める

保護者の回答(図8)の中には、「川の流れる音」「月明かりが綺麗に見える」「美味しい空気」「昔話の宝庫」など、地域の様々な魅力が書かれており、児童はどのような言葉が校歌に合うかを検討する姿が見られた。また、「伊久美小の児童にどのような子供になってほしいですか」という回答を基に、後半の構成に合う歌詞を考えていた。

(イ) 上級生の考えに触れ自己の考えを広げ深める

上級生の考えに触れる

第4時と第5時の間に、ジャムボードを活用し一人一人が作った歌詞について上級生からアドバイスを受けた(図9)。上級生には歌詞の構成や完成した校歌を地域の人へも見てもらうことを、事前に伝え、アドバイスが単元の目標から外れないよう留意した。

上級生 B					
山からいきなり星のことに変わっちゃってつながるように言るといいと思うよ。言葉自体はいいからあとは組み合わせだね。	緑あふれる	動物いっぱい	ああこの夜に	勇気あふれる	われらは伊久美
伊久美地区	菩提山	星を見る	伊久美っ子	たくさん詰め込んでいいと思った。でも少し詰め込みすぎかもだから、一つのこと絞るかも少し言い方を変えて上手く繋げればいいと思う。	上級生 A
緑あふれると勇気あふれるでかけているのが良いと思ったよ。	上級生 C				

図9 5年生が作った歌詞についての上級生からのアドバイス

上級生の考えから自己の考えを広げ深める

第5時の始めに上級生からのアドバイスを見て、自分の歌詞は完成したと思っていた児童も、歌詞をよりよくするために再び歌詞を考え始めた。その他の児童も、上級生からのアドバイスを基に教室内では学級の児童と協働したり、国語辞典や歌集などを参考にしたりしながら歌詞を推敲する姿が見られた(図10)。



図10 歌詞を推敲する児童の様子

(5) 分析と考察

ア 授業実践 I

他校の児童の考えに触れる

図 11 は 4 年生社会科の共同授業実施者が「伊久美小で協働的な学びを行う際の課題」について記述したものである。

	事前質問紙調査（6月）	事後質問紙調査（12月）
質問文	「伊久美小で協働的な学びを行う際の課題を教えてください」	「『伊久美小で協働的な学びを行う際の課題』が ICT 活用によって改善したことがあれば教えてください」
回答	限られた他者との協働であるため、考えの深まり、広がりにも余白が少ない感覚がある。	① 関わりの対象となる相手の人数が増えたことで、自分とは異なる視点で考えている他者に触れる機会が増えた。 ② 単元の内容と重ねて考えてみると、 <u>自身が住む地域とは異なる特色を知る機会となった。</u>

図 11 「伊久美小で協働的な学びを行う際の課題」についての記述

図 11、事後質問紙調査（12月）①の「関わりの対象となる相手の人数が増えた」という記述から、クラウドを活用して他校の児童と考えを共有することで、事前質問紙調査（6月）の「限られた他者」としか協働できないという量的な問題の解決につながったことが分かる。また、図 11、事後質問紙調査（12月）②の「自身が住む地域とは異なる特色を知る機会となった」という回答から、山間部と都市部の地理的環境の違う児童同士が考えを共有することは単元の目標から考えても効果的な取組であったと言える。

他校の児童の考えから自己の考えを広げ深める

第 4 時終了後、「インターネット上で他校の児童のスライドを見ることは参考になりましたか」と質問をし、11 人（91.6%）の児童が肯定的な回答をした。表 2、a から f までは、授業者が第 4 時で児童の考えが広がり深まったかを想定した姿である。児童に「(スライド上で情報を共有する学校の児童のスライドの) どのようなことが参考になりましたか」(複数回答) という質問をし、回答から児童の考えが広がり深まったかを考察した。

表 2 スライド上で情報を共有する学校の児童のスライドで参考になったこと [N=12]

a	山には山の、町には町の人々の努力や工夫があることに気付いた。	58.3%
b	山と町の人々の努力や工夫の共通点に気付くことができた。	25.0%
c	山と町について比べることで、山のよさや町のよさを知ることができた。	66.6%
d	自分と違う考えがあったので、もう 1 度調べ直したり考え直したりした。	33.3%
e	山でできること、町でできることの違いに気付くことができた。	83.3%
f	次の調べ学習で、自分の調べたい市町を選ぶとき、どのような市町を選べばよいか参考になった。	33.3%
g	参考にならなかった。	8.3%

表 2 の e 「山でできること、町でできることの違いに気付くことができた」10 人（83.3%）、c 「山と町について比べることで、山のよさや町のよさを知ることができ

た」8人(66.6%)と数値が高いことから児童は山間部と都市部を比較しながらスライドを見て、自己の考えを広げ深めていたと考えられる。

単元後半で児童は研究協力校の市以外で静岡県内のどの市町を調べるかを決めた。8人(66.6%)の児童が海辺の市町を調べることにした。海辺の市町を選択した児童に「なぜ海辺の市町を調べたいのか」をインタビューしたところ、第4時まで「(山間部と都市部の特徴が分かったので)今度は海辺の市町を調べたい」という発言が多かった。単元前半の学習を生かし地理的環境に着目して学習課題を決定していることが分かる。

また、自分たちの住む地域と地理的環境の似た市町を選んだ児童もいた。図12は児童の住む地域と地理的環境が似た伊豆市について調べた児童のスライドの変容である。

都市部に住む児童からの質問

緑(犬間)の有名なものとその		
どこにある?	どういう場所?	何が有名?
島田市伊久美犬間	坂道を登って高いところにある。	・クラフトビール ・城山橋 ・草平
他にどんな工夫がありますか?	人々はどんなどりよくやくふうをしている?	
理由は	クラフトビールで、ビールを作っている人やその地域のことを知ってもらうように努力している。伊久美川から流れる地下水を仕込み水として使用して作っている。「やまゆり」は、もともと人気だからそれを活かしてクラフトビールを作っている。 島田市各地で無農薬栽培された茶葉を副原料に使用して作ったから。 伊久美川の地下水を使用している。	

➔

緑(伊豆市)市		
どこにある?	どういう土地?	その土地ならではのもの
そこまで土地は、高くない。周りに山と海がある。	わさび	多量の降雨や地質に恵まれた自然環境を有し年間を通じて13℃前後の湧き水が豊富に湧き出しているため栽培地として優れている。収量・品質ともに日本一の座を守りつづけている。
人々はその土地ならではのものをどのように生かしている?		
伊豆のわさびは、中伊豆地区と湯ヶ島地区で約350軒の農家、75ヘクタールで主に生産され、品質、栽培面積生産量とも全国一を誇っており、東京市場他に約150トンが出荷される。わさびの根茎を生わさびといひすりおろして薬味として、刺し身寿司などに添えて食べる。ほかに、わさび餅・わさびそば・わさびなめたけがある。		

図12 県内の市町の様子をまとめたスライド

この児童は、自分の住む地域についてのスライドを作成する過程で、他校の児童とクラウド上で交流したことをきっかけに、自分の住む地域の人々は地下水を活用していることや、農作物を生かして特産物を作っているという気づきを得た。その後、児童は自分の住む地域と似た地理的環境にある伊豆市を選び水と農作物に着目して伊豆市がどのような特産物を生み出しているのかについてスライドがまとめられていることが分かる。

このようなスライドを作成できたのは、児童が「自分の住む地域と似た地理的環境にある地域は、自分たちと同じように地理的環境を生かしているのだろうか」という新たに問題を見だし、自分の住む地域について調べた学習で得た知識を関連付けながら、スライドをまとめたからだと考えられる。これは表2で授業者が想定していた自己の考えを広げ深めた姿の想定を超えるものであった。

イ 授業実践Ⅱ

(7) 保護者の考えに触れ自己の考えを広げ深める

保護者の考えに触れる

図13は、保護者のアンケート結果を知る前に児童が歌詞に使用していた言葉と、保護者のアンケート「伊久美にはどのような魅力がありますか」から得られた

回答をテキストマイニングしたものである。保護者のアンケート回答は語彙の量が多く、歌詞の作成に役立ったと考えられる。

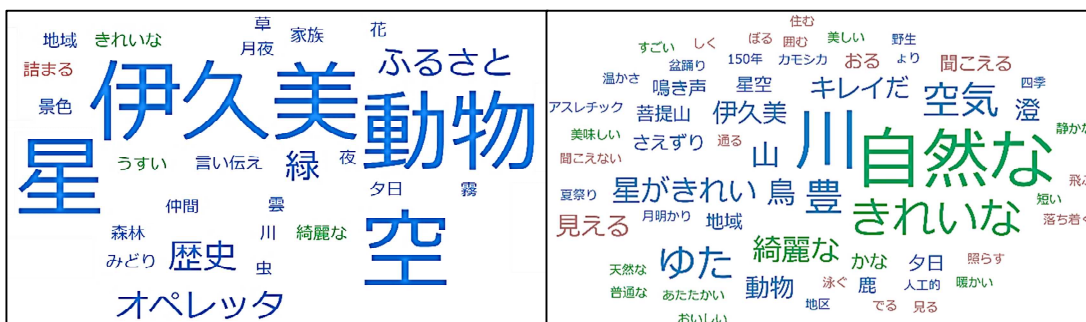


図 13 保護者のアンケート結果を知る前に児童が歌詞に使用した言葉（左）と、保護者のアンケート回答（右）をテキストマイニングしたもの
保護者の考えから自己の考えを広げ深める

第4時終了後、「自分の家族や他の家族のアンケートを見ることは参考になりましたか」と質問をした。7人（100%）の児童が肯定的な回答をした。表3、aからeまでは、授業者が保護者の考えに触れることで児童の考えが広がり深まったかを想定した姿である。続けて、「どのようなことが参考になりましたか」（複数回答）という質問をした。b、c、dの数値が高いことから、児童は保護者のアンケートを基に歌詞に使う言葉を考えたり、自分の選んだ言葉を再考したりするなどして考えを広げ深めていることが分かる。

表 3 保護者のアンケートで参考になったこと [N=7]

a	自分と似た考えがあったので、自分の考えに自信を持つことができた。	85.7%
b	自分と違う考えがあったので、もう1度、言葉を考え直した。	100%
c	自分の家族や他の家族の考えがヒントになり、新たな考えが思いついた。	85.7%
d	自分では気づけない言葉に気づくことができた。	100%
e	7音、5音のリズムにするのに、参考になった。	57.1%
f	参考にならなかった。	0%

図14は、第2時からのある児童の歌詞の変容である。保護者のアンケートを参考にする前は歌詞に使う言葉が思いつかなかった児童も、第3時で保護者への質問1「伊久美にはどのような魅力がありますか」の回答を基に地域の自然について言葉を選ぶことができた。第4時では保護者への質問2「伊久美小の児童に、どのような子供になってほしいですか」の回答を基に、児童に望む姿を考えていったことが分かる。

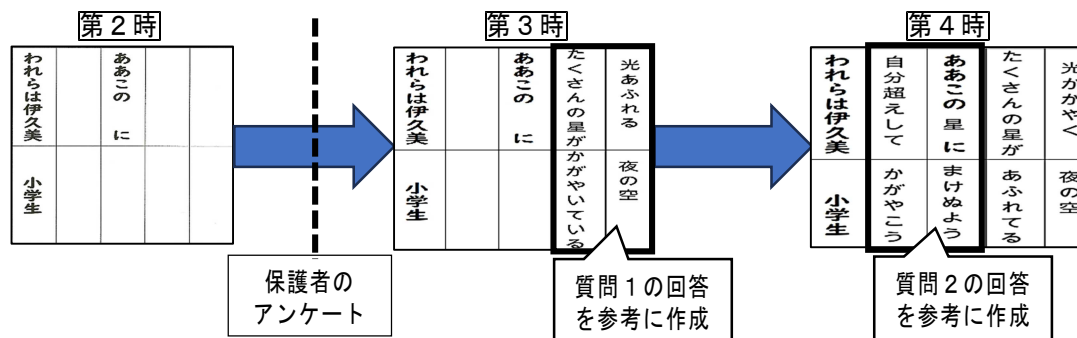


図 14 ある児童の歌詞の変容

(4) 上級生の考えに触れ自己の考えを広げ深める

上級生の考えに触れる

図 15 は、事後質問紙調査における 5 年生国語科の共同授業実施者（以下、「国語科教諭」という。）の単元に関する記述である。なお、下線部は国語科教諭から見た、上級生のコメントを参考にした際のある児童の表れである。

(省略)子供のもっている言葉の引き出しが少なかったので、保護者や在校生の意見を参考にすることによって、思いをつたえるための「より適切な言葉」を選択することができていた。途中、「これのできた！！」と満足していた子も、他者の考えに出合ったあと、再考する姿からも、よりよい言葉、イメージに合う言葉が本当にこれでいいのか考え、自己調整しながら考えることができていたように思う。

図 15 国語科教諭の単元に関する記述

国語科教諭から見ても、上級生の考えに触れることで、児童がよりよい言葉、イメージに合う言葉を考え続けたことが分かる。このことから上級生の考えに触れたことは、この児童にとって価値のあるものであったことが分かる。

上級生の考えから自己の考えを広げ深める

5 年生の児童へ向け、単元終了後に「上級生のコメントを見ることは参考になりましたか」と質問をし、7 人（100%）の児童が肯定的な回答をした。表 4、a から e までは、授業者が上級生の考えに触れることで児童の考えが広がり深まったかを想定した姿である。

表 4 上級生のコメントで参考になったこと [N=7]

a	上級生の感想や考えがヒントになり、言葉と言葉のつながりを考え直した。	71.4%
b	上級生の感想や考えがヒントになり、リズム（7 音・5 音）を考え直した。	57.1%
c	上級生の感想や考えがヒントになり、新たな言葉が思いついた。	42.8%
d	自分が作った校歌の歌詞が、どのように伝わったか確認できた。	100%
e	自分が作った校歌の歌詞について自信を持つことができた。	57.1%
f	参考にならなかった。	0%

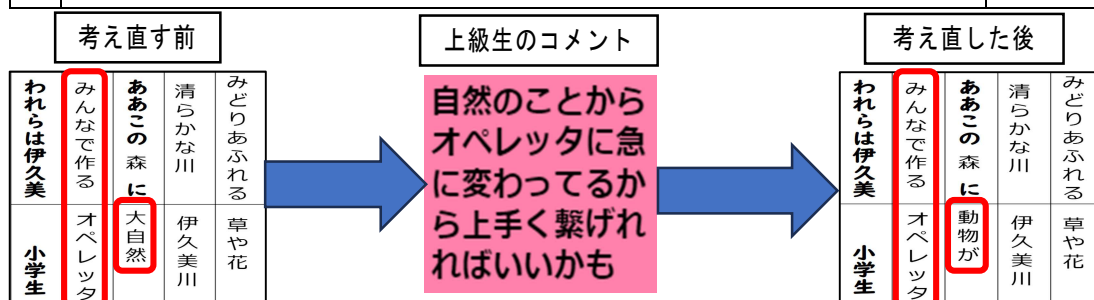


図 16 上級生のコメントを基に歌詞を考え直した児童の図

図 16 は上級生のコメントを基に歌詞を考え直した児童の図である。児童は上級生のコメントを基に、学級の児童と協働しながら校歌に合う言葉を考え、校内で取り組むオペレッタには動物が登場することを思い出し、「大自然」を「動物が」という言葉に置き換えた。この児童の振り返りには「6 年生から意見をもらってわからなくなってしまったけど（中略）みんなの意見でしっくりきた」とあり、上級生のコメントによって言葉と言葉のつながりを考え直したことが分かる。

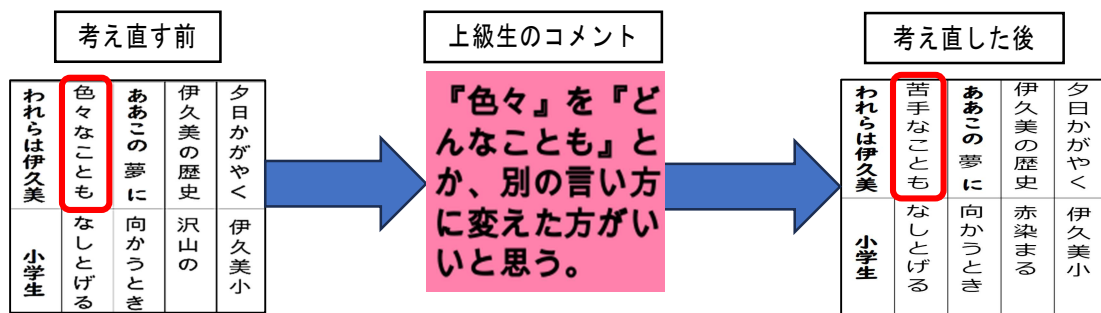


図 17 上級生のコメントを基に歌詞を考え直した児童の図

また、図 17 は上級生のコメントを基に歌詞を考え直した別の児童の図である。考え直す前の「色々なことも」という表現は、保護者のアンケートの表現をそのまま使用していたが、上級生のコメントを基に、保護者の回答を全く同じように使うのではなく、他者に伝わるよう自分の言葉で表現しようとする姿が見られた。この児童は最終的に「色々なことも」を「苦手なことも」と自分の言葉に置き換えた。

このような児童の表れから、上級生のコメントを基に児童が考えを広げ深めていたことが分かる。

5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

授業実践Ⅰは、県内の地域の特色を考えることを目的として、地理的環境の違う他校の児童とクラウド上で情報共有したことで、自分の住む地域の特色がはっきりしたり、自分たちとは違う地域の特色について理解を深めたりすることができた。授業実践Ⅱは、歌詞に合う言葉や構成、書き表し方などを考えることを目的として、保護者と上級生からインターネットを活用しアンケートをとったり、クラウド上でコメントをもらったりしたことで、児童は自分では思いつかなかった言葉に気付いたり、歌詞の構成や書き表し方を再考したりすることができた。これらのことから、ICTを活用して多様な他者の考えに触れることで、自己の考えを広げ深める児童の育成をすることができたといえる。

(2) 今後の研究課題

国語科、社会科だけでなく、多くの教科等で ICT を活用して児童が多様な他者の考えに触れ、自己の考えを広げ深めることができるような授業を構想し、実践していく必要がある。また、それを継続していくことが望まれる。

参考文献

- ・文部科学省（2021）「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」
- ・中央教育審議会（2021）「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」
- ・文部科学省（2017）「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編」
- ・文部科学省（2020）「教育の情報化に関する手引（追補版）」